

## 「リニア中央新幹線整備を地域振興に活かす伊那谷自治体会議」議事録

1 日時 令和7年9月17日（水）13:30～14:30

2 会場 県庁3階 第3応接室ほかオンライン開催

3 出席者

【県】（東京事務所）阿部知事、安藤リニア整備推進局次長

（県 庁）新田副知事、大日方企画振興部次長、室賀リニア整備推進局長、  
細野リニア整備推進局次長

（飯田合庁）岩下南信州地域振興局長、宮島南信州地域振興局副局長、  
折井飯田建設事務所長

（伊那合庁）池上上伊那地域振興局長、川上伊那建設事務所長

【市】佐藤飯田市長、白鳥伊那市長、伊藤駒ヶ根市長

【南信州広域連合代表】下平豊丘村長

【上伊那広域連合代表】白鳥箕輪町長

【オブザーバー】向井南木曽町長（木曽広域連合）、小林木曽地域振興局長

4 発言内容

【細野 リニア整備推進局次長】

それでは定刻になりましたので、ただいまから、リニア中央新幹線整備を地域振興に活かす伊那谷自治体会議を開催いたします。

初めに本会議の座長であります阿部知事よりご挨拶をお願いいたします。

【阿部知事】

皆さんこんにちは。

今日、私は東京からの参加ということでありますが、この会議はオンラインでの開催ということで、メンバーの皆様方には大変お忙しい中ご出席をいただきましてまずは誠にありがとうございます。

また日頃から連携をさせていただく中で、リニア中央新幹線の建設促進に向けて取り組みいただいておりますこと、また各市町村長の皆様には地域課題の解決に向けて、大変それぞれご尽力をいただいておりますこと深く敬意と感謝を表したいと思います。本当にありがとうございます。

その一方で、リニア中央新幹線ができるだけでは地域は元気になっていかないと思っております。

そういう意味でリニア中央新幹線を活用して、伊那谷あるいは木曽も含めた南信全体、さらには、長野県全体をどう活力ある地域にリニアを契機に変貌させていくかが大きな課題であり、この会議はだいぶ間が空いてしまって大変恐縮ではありますが、前回国のリニア

開業に伴う新たな圏域形成に関する関係府省等会議に対して、長野県として提案した内容を共有させていただきました。

これもぜひ具体化、具現化を図っていかなくちゃいけないと思いますし、また、リニアバレー構想推進に向けては、これまでも市町村の皆様方との検討で方向性を共有しながら、役割分担を決めて取り組んでいこうということで、確認をさせてきていただいているところでもあります。

しかしながら、まだまだ足踏みしている分野がほとんどではないかというのが、私の認識でございます。

また、リニアの開業時期が明確になっていない状況ではありますが、我々としては引き続き1日も早い開業、それから開業時期の明確化をJR東海に対しては、結束して求めていかなければいけないと思っています。

その一方で、伊那谷全体あるいは木曾を含めてどうするかという方針が決まらずにこのまま進んでいくことは許されないと思っています。

皆様と方向をしっかりと共有しながら、伊那谷の活性化に向けて、しっかりと県としても取り組んでいきたいと思っております。本日の会議は、少し間が空いておりますので、今までの振り返りも含めて皆さんと問題意識を共有して、ここからギアを切り替えて、スピードアップをしてより具体的な取り組みを行うようにしていきたいと思っております。

皆様方の引き続きのご協力、それぞれの立場でのご尽力を心からお礼申し上げ、私からの冒頭の挨拶としたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

【細野 リニア整備推進局次長】

ありがとうございました。

それでは議題に移りたいと思います。「これまでの経過とリニアバレー構想推進に向けた今後の取り組み」についてです。

【室賀 リニア整備推進局長】

リニア整備推進局長の室賀です。いつもお世話になっております。

それでは、資料1-1「これまでの経過とリニアバレー構想推進に向けた今後の取り組み」ということで、経過をまずはご説明させていただきます。

まず1行目、伊那谷自治体会議ではこれまで、平成28年2月にリニアバレー構想を策定しております。2行目になりますが、令和2年3月に策定いたしましたリニアバレー構想実現プラン基本方針で、伊那谷地域での具体的な取り組みと戦略的なチャレンジとしてまとめたところでもあります。

資料1-3をご覧ください。右側であります。赤字の部分がリニア開業に向けて、各機関が連携して喫緊に取り組むものとしております。それと戦略的チャレンジのところになりますが、さらに黒字の部分につきましては、既に取り組みが行われており各機関が進め

ているということで整理をされています。

今回ここで整理いたしました取り組みについて、後ほど振り返りをさせていただきたいと考えております。

戻りまして、資料１－１、３行目であります。

昨年、リニア開業に伴う新たな圏域形成に関する関係府省等会議という国の会議に対し、伊那谷地域の特性、強みを生かした実証都市圏域を形成していこうということで、長野県の提案をまとめたところであります。

この提案の内容を、４行目にありますとおり、前回の伊那谷自治体会議で共有をさせていただいたところであります。出席いただきました市町村長の皆様方にもご議論していただいた政策の方向性でこの内容を進めていくことを確認したところであります。

この長野県提案につきましては、資料１－１に赤字で中段へ記載させていただいておりますが、伊那谷自治体会議でこれまで取り組んでいくこととしておりました基本方針、先ほどの資料１－３になりますが、この考え方を基本といたしまして、県が取り組んで取りまとめたものであります。資料１－３の先ほどの取り組みと連動しながら事業を進めていくものと考えております。

この関係府省等会議で提案いたしました事業内容を推進しつつ、県といたしましては、これまでの取り組みの現状についても、一度振り返り、今後の方向性の確認をする必要があると思っております。

本日はこの後、意見交換の時間がございます。この時間の中で各項目の今後の方向性についてもご発言をいただきたいと考えております。

なお、本日出た意見を踏まえ、今後、幹事会でも議論していきたいと考えております。

資料１－１、５行目になります。関係府省等会議における長野県提案でございますが、昨年９月の国の中間取りまとめにこの記載がほぼそのまま反映をされている状況であります。

これに加えまして、国においては、この中間取りまとめの内容を資料１－６及び参考資料に記載をしておりますが、現在策定中の次期広域地方計画へ反映し、リニア中間駅を核とした広域の地域活性化として、広域連携プロジェクトにも続けるよう予定されていると聞いております。

あわせまして、リニア中間４駅における広域連携についても具体化すべく、長野県が現在主導しまして、神奈川県、山梨県、岐阜県と共同で検討を進めているところでございます。

県としましては、重点提案として掲げました多極分散型国家のモデルとなる実証都市圏域の先行形成に向け、ベースとしておりますリニアバレー構想の振り返りも踏まえながら、取り組みを具体化していきたいと考えております。説明は以上です。

【細野 リニア整備推進局次長】

続きまして、議題（２）をお願いいたします。リニア開業に向けた今後の取組、主な取組状況の共有として、県、伊那市、駒ヶ根市、飯田市の順でお願いしたいと思います。

まず、長野県の取組につきまして室賀からご説明申し上げます。

【室賀 リニア整備推進局長】

先ほど資料１－４及び１－５で説明をさせていただきましたリニア関係府省等会議における長野県提案を事業化するため、具体的な行動を開始したいと考えております。

資料２－１をご覧ください。

「リニアを核とした多極分散型国家のモデル検討」ワーキングチームの設立についてです。ワーキングチームでは、リニアによる時間距離短縮効果とデジタル技術活用、地域資源を強みといたしまして、実証都市圏域形成のための施策を検討したいと考えております。

検討事項といたしましては、まずは中央省庁や国、研究機関の一部機能や国、研究機関、各種実証プロジェクトの人材受け入れなどを想定しております。

進め方といたしましては、１９日に長野県リニア中央新幹線地域振興推進本部会議におきまして、県として決定をし、進めていきたいと考えております。

今後、具体的なテーマごとに検討メンバーをお願いすることを考えておりまして、市町村の皆様方にお声がけをさせていただきたいと考えておりますので、何卒ご協力をお願いいたします。

【細野 リニア整備推進局次長】

続きまして、伊那市の取組につきまして、白鳥市長お願いいたします。

【白鳥 伊那市長】

最初に日本を支えるモデル地域を目指してということで、数年前からこんな取組をしておりますが、阿部知事のおっしゃっている地方から日本社会を変えるところが非常に近いかなと思っております。東京一極集中を是正する。リニアが開業することによっていろんなチャンスが巡ってまいりますし、地方がもう一度息を吹き返すということで考えています。

それに向けて、地域ブランディングということで、つい先日、伊那市のブランディング、ブランドスローガンを決めました。６年前からずっと検討していましたが、「森といきる伊那市」ということで、森林と関わっているだけではなくて、全てのことが森と繋がっているというそんな意味です。哲学的であり、あるいは森に対する畏敬の念だとか、福祉にしても観光にしても全て森と密接な繋がりがあって今成り立っているということで、「森といきる伊那市」というブランディングを作りました。これから何年かかけてだんだ

ん浸透または具体化していくという作業に入ってまいります。

その次ですが、地域ブランドとしてのステータスのもとで地方創生に資するシンボリックな取組を三つ紹介させていただきます。

まず一つ目は、ソーシャルフォレストリー都市の形成であります。これは伊那市独自の理念として、林業関係者だけではなくて、地域住民と協働して森林整備に参加をし、資源の利活用を行うもので、これを具体化するために「50年の森林ビジョン」を策定しております。

このビジョンの推進によって、森林を単なる経済価値だけではなくて、文化、防災、環境などあらゆる方面において、50年という時間軸で社会資本としての森の価値を高めていくことがまず一つであります。

次はカーボンニュートラルの推進です。具体的には「伊那から減らそう CO2!!」ということで、平成 28 年から取組をしております。小水力発電とか、木質バイオマスの活用、公共施設への照明防犯灯の LED 化、それから充電ステーションの整備とか、EV 車両の導入、低炭素社会の実現を図ることを目的としています。

三つ目ですが、これはローカル GovTech であります。テクノロジーを活用した地域課題の解決であります。地域における大きな課題としてあるのは、移動・買い物・医療。こうした移動困難者、買い物弱者、医療の困難者という三つの大きな課題がありまして、移動については伊那市では A I によるドア・ツー・ドアのオンデマンド乗合サービスとしての「ぐるっとタクシー」とか、デジタルタクシーとして、ドア・ツー・ドアで移動できるような環境を作っております。

買い物につきましても、「ゆうあいマーケット」といいまして、ドローンを使った商品の注文とか配送ということで、午前中注文があれば午後には届ける。

それから医療面ですが、これはオンライン診療型 M a a S によるお医者さんが乗らない移動診療車モバイルクリニックの社会実装をしております。10 月にはもう 1 台導入して、妊産婦専用のモバイルクリニックとして予定をしております、なかなかお医者さんに行くことが難しい方のためにこれらを整備しております。

一方で、テクノロジーはあくまで手段でありまして、行政に求められる最終ゴールは、住民幸福度への訴求であります。システムのサービスではなく、マンパワーとの融合によって、ラストプロセスでは必ず人が介在するという温かみのあるサービスモデルを展開しています。

最後ですが、これは新たな政策トレンドとして空の輸送革命に取り組んでおります。5 年前から川崎重工さんと一緒になって進めておりまして、全国的にヘリコプターのソフトがパイロット不足であり、山小屋への荷揚げの業務が難しいため、それに変わる手段として、垂直離着陸型航空機 VTOL を使った物資輸送の仕組みづくりであります。またご案内しますけど 10 月の末に、伊那市で実際に荷物を運ぶデモンストレーションをする予定であります。重量が 200kg、航続距離 100km、標高 3,100m まで運ぶということを、全く無

人で行う。通信環境は Starlink や、HAPS というものを使って冗長性確保を行うということでもあります。

伊那市は、地方都市の私達がコミットしてきた日本を支えるということ、これをさらに一歩、二歩進め、日本を変えるという非常に崇高な理念のもとでこれからも官民共同で一体となってこの実現に向かって進めていきたいという思いで発表させていただきました。

それからまた後ほど少し触れたいと思いますが、先ほど県の発表の中で非常に私が心配していたことが、だんだん具体的に見えてきたかなと思ってちょっと安心しましたが、資料 1－3 の次ページの辺りですね。二次交通の整備とか、あと観光のコンテンツ作りとか、広域でなければできないこと、こうした市町村ではなかなか難しいところについては、県がかなり具体的に踏み込んでリーダーシップを取ってもらって進めていただきたいということをずっと考えておりましたので、この資料にあることを、ぜひとも私達も一緒にやりますけど、実現に向けて今まで以上に力を発揮していただきたいという思いがします。

私達伊那の場合は、リニア構想とか話をさせてもらったり、飯田市だったら、リニアの長野県駅の周辺およびバスや建物について検討したり、こうした取組は基礎自治体でもできるが、もっと大きな周回するような観光だとか、インバウンドだとか、国家戦略に近いようなものは県が思い切って旗振りをしてもらいたいということをお願いして伊那市からの発表を終わらせていただきます。

#### 【細野 リニア整備推進局次長】

ありがとうございました。

続きまして駒ヶ根市の取組について、伊藤市長お願いいたします。

#### 【伊藤 駒ヶ根市長】

リニア観点ということで言いますと、私ども駒ヶ根市としては様々なまちづくりはありますけれども、伊那谷最大の観光地ということで観光に絞ってお話をしたいと思います。

先週、名古屋市へ行ってまいりましたが、名古屋市は今、駅前の大再開発が進んでいるところであります。その中でオフィスビルの開発も進んでいるのですが、名古屋でどれぐらいの需要があるのだろうかという話をすると、名古屋と横浜の賃料を比べれば名古屋の方が安い。リニアが開業すれば、東京や首都圏から 30 分で、通勤圏であれば、同じオフィスを作るのに、横浜よりも安い名古屋の方で作って仕事をするという選択肢が相当増えるのではないかという見方もございました。

そうしますと名古屋から、この伊那谷は 40 分。そして東京からは 1 時間になりますので、伊那谷・駒ヶ根市が長野県内で首都圏・中京圏から最も近い山岳リゾートになる時代がやってまいります。それに向けて私どもとしては取組を進めてまいりたいと考えております。

その際にキーとして考えておりますのは、やはりゼロカーボン、SDGsであります。特に欧米の観光客の皆さんを意識した場合、環境に優しい、環境とともに歩んでいる観光地であるということが、選ばれる基準になる、世界標準になると考えております。駒ヶ根市、そして中央アルプスはそれが十分に可能な地域だと考えております。

現在ある観光資源、これは2万年前の氷河期からの宝物であります。千畳敷カール、そして復活を遂げたライチョウ、いずれも氷河期時代の贈り物、それをゼロカーボンの中で楽しむという形に作り上げたいと思っております。

駒ヶ根市は非常に日照時間が長い。伊那谷全体もそうですけれども、そうしたことで太陽光の発電そして現在県の企業局にも新しい水力発電所を造っていただいておりますが、こうした小水力発電を活用して再生エネルギーを活用した観光地としてまいりたいと思っております。既に山麓周遊バス等の実証実験は続けております。

もう一つの大きなキーは、山岳バスであります。駒ヶ根高原とロープウェイの駅を結ぶアクセスは、現在は非常に狭隘な県道を職人芸の運転手さんが路線バスで結んでおります。

それをぜひゼロカーボンとして仕上げていきたい。EVなどの実験も検討しましたが、なかなか馬力的に難しく、水素エンジンを使ってはどうかという検討を進めております。飯田市・信大で水素の製造が進んでおりますが、そうしたところから、この駒ヶ根高原に水素のガスステーションを持ってきていただき、これを観光の足として、使っていくことを進められないか、ぜひ検討をしたい。これは長野県とともに進めることができれば、ゼロカーボンの山岳リゾートとして大きく働くことができるのではないかと考えております。

これが駒ヶ根高原の将来像であります。この高原一帯を再開発・再整備をしまして、ゼロカーボンリゾートの基地としたいと考えております。現在、駒ヶ根市は、中央アルプスを中心に年間100万人の観光客に訪れていただいております。市の人口の30倍の方が、交流人口として既にあるということでございます。ここにインバウンドを含めてさらに上乘せをしていくことで、伊那谷全体の交流の起点としていくことを進めてまいりたいと思っております。

駒ヶ根市を入口として伊那谷各地へ繋げていきたい。観光に絞っては、(駒ヶ根市が)伊那谷の起点となりたいと考えております。ぜひよろしく願いをいたします。

【細野 リニア整備推進局次長】

ありがとうございました。

続きまして飯田市の取組について、佐藤市長お願いいたします。

【佐藤 飯田市長】

飯田市としては、先ほど阿部知事から伊那谷全体をどうするかという方向感の話があり

ましたけれど、そういった意味でゼロカーボンと森林活用、こういう観点でお話をさせてもらいたいと思います。

1 ページ目はですね、先ほど説明のあった関係府省等会議の資料ですが、この中でも、多極分散型モデルとなる実証都市圏域を先行形成していくということで、次世代産業等へのチャレンジ、それから持続可能な環境先進地域づくりをお示しいただいていますが、次のページをお願いします。

まず先ほどから話にでていた水素・信州大学が研究しているグリーン水素について、飯田市が実証タウンに選ばれてこれから水素パネルが置かれ、また堂免先生の研究拠点が置かれて飯田で研究が進んでいきます。この水素をどう活用していくか、関連作業をどう展開していくか、これが1つ飯田市としてしっかり取り組んでいきたいことになります。

次のページをお願いします。これは信州大学が作っている資料ですが、信州大学でも飯田市と特にリニア駅周辺を実証エリアとして、水素エネルギーの地産地消モデルを作っているというものであります。先ほど中部圏の広域地方計画の中で、水素のサプライチェーンという言葉が出ていましたが、長野県の場合は沿岸地域での大規模な水素プラントというよりは、地産地消モデル圏域内で必要なものを必要なだけ作るというモデルだと思います。そういったものをぜひしっかり進めていきたいというのが一つです。

次のページですが、これは関係府省等会議の中でも引用されていました。先ほど伊那市長からプレゼンテーションのあった森林を中心とした循環をさせる、色々な多面的な森林活用をすることだと思いますが、まさに森といきる伊那谷、木曽谷。森といきる信州が、一つ共有すべき方向感ではないかと思います。そういうこともあって飯田市が担当する駅周辺整備の中で創るキャノピー（大屋根）については、木質化しようということで今進めています。木質化した大屋根というのは、先ほどの循環の図ではありませんけれども、森林から切り出して活用するという循環の起点となる一つの象徴的なものと考えております。

次のページをお願いします。駅周辺のエリアには、ぜひこういった木造都市みたいな形で、いろいろ開発を進めていくにあたっては、都心・都会とかにあるようなコンクリートのビルを造るのではなくて、こういう木造都市を造っていくイメージで開発していったらどうかと思っています。

県の資料の中でもゼロカーボン都市エリアのイメージで、Loop50 の大林組の絵をお示しいただいていますが、こういったオフィスとかあるいは二地域居住のマンションといったものを駅周辺エリアに形成していく。こういうイメージで、県にもぜひ主導していただいて、そういった木造都市を造り、それを一つのフックにして、林野庁や森林総研の誘致に繋げていくイメージだろうなど。

今後、サウディング型の市場調査をやってもらって、どこでそういうことができるのかという話があることから、今飯田市では駅周辺の都市計画について、高さ制限が今までかかっていた計画の緩和を可能にしていく。これは協議によって制限を緩和するというこ



とで、先ほどのような木質化したビルを造るという場合であれば、これまでの高さ制限を緩和して民間投資を促すことも考えています。

ぜひ県と一緒に、こういった木造都市エリアを作って世界に発信できるような、そういう都市形成をしていければと考えております。

ぜひゼロカーボンと森林活用というこの二つの大きなイメージを伊那谷・木曽谷で共有をして進めていければと思います。

【細野 リニア整備推進局次長】

ありがとうございました。

長野県の取組としまして、資料２－２をもう一度振り返っていただければと思いますのでよろしくお願いいたします。

【室賀 リニア整備推進局長】

資料２－２について、先ほど伊那市長様、そして飯田市長様からもコメントいただいたものと関連する事業となります。

まずは左上になりますが、リニア駅アクセスの検討です。広域的二次交通、こちらを具体的に進めてまいりたいと考えております。

下段、左下になりますが、リニア駅近郊土地活用ということで、我々も、サウンディング型市場調査を一緒にやっていきたいと考えております。

右上でございます。駅舎のデザインにつきましても全体の調和がありますので、飯田市さんと連携して、ＪＲ東海への要望調整を図りたいと考えております。

最後右下でございます。リニア駅高架下空間の利活用ということで、交通情報を始めとして広域的な機能について幅広くサービスを提供するための高架下空間について、県として飯田市さんと一緒に検討を進めたいと考えております。

【細野 リニア整備推進局次長】

それでは、議題の最後３番目の意見交換に移りたいと思います。

先ほどの議題１、議題２に関しまして、今後のリニアバレー構想の実現に向けた今後の方向性、あるいは伊那谷全体で進めていくにあたっての連携の方策、広域でなければできないというような視点で意見交換をお願いしたいと思います。

残りの時間が２０分程度となってきましたので、大変申し訳ありませんが、概ね２分程度でお願いできればと思います。こちらから指名をさせていただきますが、まず阿部知事いかがでしょうか。

【阿部知事】

各市長さんからお話をいただいて大変ありがとうございます。大体方向感が同じ方向に

なっているのではないかと思います。今話していた森、フォレスト、森林をどう使うかということと、ゼロカーボンが共通しているキーワードではないかと思います。

うちのまとめ方があまりそれらと合っていないので、二次交通の話だとかまちづくりのあり方はもちろん考えなきゃいけないと思っています。一方で、今出てきたようなキーワード、駒ヶ根市さんの観光のゼロカーボンリゾートも含めて、トータルで伊那谷をこういう地域にしていきたいと思います。今のお話を伺っているとかなり絵が描けそうだなと思います。そこは県でしっかり取組をしたいと思いますので、リニア局で受け止めて、まとめてもらいます。

それから、最近『「風の谷」という希望』という本を、安宅和人さんが書いています。読まれている方もいらっしゃると思いますが、人口減少の中で都市化が問題ではないかという問題意識の中で、人口密度が低い地域を風の谷として再生するにはどうすればいいかを色々な角度から検討されている本です。私はまだ全部読んでいませんが、非常に視点とか取組の方向性に共感できる内容がたくさんあるし、伊那谷の未来を考える上で非常に参考になるのではないかと思います。私は皆さんとこの本の話をもっと共有したいと思います。これを読んでいると、伊那谷をどうするかと考えたときに、今日皆さんからお話が出ているとおり、大都市とは違う地域をどうつくるか、多分まちづくりも、さっきの木造都市の話もありましたけれども、既存の街をイメージしてまちづくりをしても多分あまり人が集まらないのかなと思うので、少し尖った方向性で地域のことを考えなきゃいけないのだと思います。

そうした中で、この風の谷を生成する求心力の3要素を言われていて、一つは絶景、景観ですね。伊那谷はアルプスの景観に恵まれていますし、大都市から来た人は来るだけで心地良さを感じると思います。

そうした人たちを受け入れるためには、安心できる生活基盤が必要だと。私はやっぱり教育の問題と、それから医療の問題。私は県と市町村と一緒に、全県全体の医療と教育を考えなければいけない立場であります。本当に人を惹きつける地域を実験的に作るのであれば、教育と医療は、かなり市町村の皆さんに依存している部分が多いわけですが、結構一緒に考えたり一緒に取り組んだりしているので、ぜひ何か考える必要があるのかなと。

教育は、実は午前中に総合教育会議で教育委員会の皆さんと話しましたが、例えば外国の高度人材を受け入れるために、英語で教育するとか、そういうことも考えなきゃいけないのではないかというご提案もありました。

まさにこの地域がリニアで名古屋や東京と繋がるときに、この地域を発展させていく上では、外国人に限らず、いわゆるクリエイティブ人材をどう集められるかはかなり大きな一つのキーワードになってくると思います。

そういったことを考えるために教育をどうしていくかを、今教育委員会の TOCO-TON を始め、今までの教育とは一線を画して、長野県から学びの新しい当たり前を作ろうということを取組を始めています。市町村と一緒にやらないとできないことがたくさんあるの

で、この教育改革も一緒にやらせていただきたい。

それから医療の部分は、持続可能な医療体制を作っていく、そして限られた医療人材を有効に活かしていくことを考えると、今医療のグランドデザインで県としてお示ししている医療機関の役割分担、連携が非常に重要になってきます。

この地域で安心して暮らせるための医療のあり方を県も中心になって考えなければいけない課題でありますので、一緒に考えさせていただければありがたいと思います。

今日方向性として出されている森林林業であったり、あるいは観光であったり、カーボンニュートラルであったり、3市ほぼ同じような方向性だと思いますので、県としても整理をさせていただきます。

もう一つは、安心して暮らせる地域社会をどうするかという観点では、教育だったり医療であったり、具体的な取り組みを一緒に考えていきたいと思います。

二地域居住であったり、関係人口であったり、移住も重要ではありますが、リニアで、短時間で移動できるメリットを生かして、どういう人たちにどう関わってもらおうかということを、もう少し掘り下げていく必要があるかと思いますので、まずは一緒に考えていきたいと思います。

私からは以上です。よろしくお願いします。

【細野 リニア整備推進局次長】

ありがとうございました。

続きまして、このあと途中退席予定の伊那市白鳥市長からお願いします。

【白鳥 伊那市長】

私からは、長野県で最後に室賀さんに説明してもらった取組の事例がありましたが、これはこれでよく分かりますが、県としてはもっと広い視野で捉えてもらいたいと思います。

例えばリニアの駅のアクセス、広域的な二次交通だとか、トランジットの仕方だとか、これはいいと思います。

その下の土地利用だとか、駅のデザインとか、空間利用は飯田市さんがやればいい話であって、県はもっと高所から物事を見て、例えばインバウンドのある広域観光を目指すだけじゃなくて木曽谷だとか長野県全域にどうやって誘導していくとか、二地域居住の具体的な誘導策はどうするのかとか、首都機能を分散させるときに長野県あるいは伊那谷であればどんなところを対象にして取り組んでいくのかとか、本社機能として持ってくるのか、それぞれの取組について具体的にチームを組んでやっていくとか、そんなところをぜひ県でやってもらえればと思います。

この話の中でいくと、今日ちょうど箕輪の町長さんもいらっしゃいますが、伊那市の話はしていますが、上伊那全体の市町村の話は出てこないですね。

広域連合はあるにしても、このリニアと上伊那全体はどうか。あるいは飯田市と下伊那の皆さんはどういう関係でリニアをどう捉えているのか、どういうアクションをするのかがちょっと見えないので、3市だけでやっているわけじゃないので、そうしたところは県で、ぜひもっと高所から物事を見て進めてもらいたいと思います。

私もこの会議は最初から出ていますが、なかなか具体的なものが見えないまま今まで来ています。もうそんな時期ではないので、これからもっと踏み込んで示してもらい、あるいは私達もどんどん意見を言って、丁々発止のやり取りをしながら、ビジョンを変えないと効果が現れないと思います。ぜひそんな点でのリーダーシップを発揮していただきたいということを私からお願いをしておきます。

【細野 リニア整備推進局次長】

ありがとうございます。

本日上伊那広域連合の代表で、箕輪町の白鳥町長がご出席されていますので、白鳥町長お願いいたします。

【白鳥 箕輪町長】

こんにちは。箕輪町の白鳥でございます。私は上伊那の6町村の代表というイメージで話をさせていただきます。

上伊那は、北から南まで50キロと非常に長い距離を持っていることもあって、リニアに対する関心度とか、やらなければいけない振興策が、北と南ではかなり違うというのが実態だと思います。

あわせて、今まで長野県の交通結節点は、新幹線の長野を除けば多分松本・塩尻だったと思います。その交通結節点と新たにできる長野県駅との関連を、今回、広域二次交通という話なので、そういったところをいかに結びつけるかという問題がまだ見えてこないという感じがしています。

そういう意味で特に上伊那北部にとってはまだ遠い部分があるという感じがいたしました。

それと上伊那全体を考えますと、上伊那地域の製造業の集積は、町村部も含めて、日本の中でも圧倒的な集積度だと思っています。これを使って、中小企業なり、研究機関とか、森林もそうですが、こういった研究レベルの話が誘致できないか、これはぜひ県に期待をさせていただきたい。

伊那市長、駒ヶ根市長から話がありましたので、私達はそれに連携をさせていただきたいと思いますが、そのことを非常に強く感じました。

また、ゼロカーボンの話は南信地域でかなり取り組んでいる部分ですので、私達も取り組んでいますけども、ぜひ進めていただきたいと思います。

もう一つ、暮らしやすさという意味合いで、長野県は元々健康長寿や平均寿命が高く、

上伊那地域の平均寿命は長野県の中でも圧倒的に高いです。そういう意味でこの地域の暮らしやすさ、自然の豊かさを前面に出して、取り組んでいく必要があると思います。森だけではなくて、それ以外の暮らしやすさも大事にしてもらえるとありがたいと、そういった取組を期待します。

それと上伊那地域、特に私ども含む北部は、工事現場などが見えないので、まだ遠い部分があります。そういう意味で一番お願いしたいことは開通時期の目途を示していただきたい。それがなかなかできないとすれば、いかにリニア中央新幹線のPRをするかを改めてお願いをしておきたいと思います。

以上です。よろしくお願いします。

【細野 リニア整備推進局次長】

ありがとうございました。

続きまして本日、南信州広域連合の代表でご参加いただいております豊丘村の下平村長お願いいたします。

【下平 豊丘村長】

豊丘村の下平です。よろしくお願いします。

県の資料の中で、先ほどから話題にもなっています、サウンディング型市場調査を実施という中で、これからこの地域のランドデザインをつくっていくためにとても大事なものだと思います。

サウンディング型市場調査は相手がいなくなかなかできません。おかげ様で知事がしっかりと動いていただきまして、飯田下伊那に関係の深い京浜急行、さらには長野県に関係の深い東急観光など、一緒になってやっていただけるプレイヤーを探していただいて紹介いただけること、これはすごく大事なことだろうとつくづく思います。

先ほどからいわゆる伊那バレー、リニアバレーという話が出てきますが、多分サウンディング型で一番成功したのは、シリコンバレーで間違いないと思います。

シリコンバレーは第二次世界大戦のときに、ドイツ軍のレーダー網がすごくて、連合軍がやられたので、これからは無線や半導体の時代だということで、国とスタンフォード大学と組んで始めて、そこから企業がどんどん出てきたわけです。

そのことによって、今カリフォルニア州は、日本全体のGDPより大きくなっています。

今度できるリニア中央新幹線は、新幹線の使い勝手を持った空港ができるようなものです。ですからそれが東京、名古屋、大阪と完成していく中で、私どもとしてまず一番大事なことは、この地域に雇用を創出して、いかに生産年齢人口の皆さんに住んでもらうか。そのことによって人口が増えて社会の環境のもとを作れるかということ、インフラを造るかということ、これは人口がないとできないことです。

それにプラス、先ほどから話題になっている飯田下伊那、伊那、木曾、それぞれの個性を生かしたモノ、自然、文化、歴史、そういうものをしっかりと押さえながら活性化していくこと、それがすごく大事なことだろうと思っています。

先ほどから出た話、とても素晴らしい話です。先ほど知事さんも言われましたが、私も尖がっているからいいなとは思いますが、あまりそれだけで尖り過ぎも問題があるのではないかと思います。

この地域はとてつもない数の可能性がある場所だと思います。それをいろいろな角度からぜひとも県が中心になって、飯田下伊那、上伊那、それから木曾みんなでどういう地域にするかというグランドデザインを民間とともに築くことが大事ではないかという気がします。以上です。

【細野 リニア整備推進局次長】

ありがとうございました。

本日は県庁会場で、南信地区担当でもあります新田副知事が出席しておりますので、コメントをお願いいたします。

【新田副知事】

皆さん、こんにちは。初めて参加させていただきます副知事の新田です。

今日いろいろな議論を聞かせていただきまして、今長野県の担当の1人としても強く感じているのは、具体的な話が進んでいないという状況からこれを打開してギアチェンジするような取組が必要だと考えております。

これまでも話がありましたようにこれから人口減少社会を迎えていきます。

そうした中で、人工知能、AI、そして自動化といったテクノロジーの進化を踏まえて、これを先取りしていくような、未来都市を考えていくことが必要じゃないかと思っています。

先ほども多極分散の先導モデルとしての地域、これを国家観を持ってというお話もございました。国家戦略にこういった取組を位置づける必要があります。

先ほど、シリコンバレーの話もありましたが、あれはスタンフォード大学を中心として軍事計画局がいろんな技術をあそこからスピニングアウトさせております。

こういった国家戦略に位置付けていく必要があるわけですが、そのためにこそ、世界水準で広く認知されるような地域にしていく必要があると思います。

下伊那、上伊那それだけでなく、県全体にこの効果を波及させていくためにも、特に2点がまず重要だと感じております。

2点というのは、地域資源を強みとした実証都市圏域を作るという話と広域二次交通の話がありました。この2点については、特に県・市町村の地域産業の人的リソースを集中的に導入して議論を進めていく必要があると思います。

この地域資源を強みとした実証都市圏域、資料2-1に説明がありましたけれども、これは単に実証プロジェクトにとどまることなく社会実装をキーワードに、社会実装を目標にモデルとなる具体的テーマを早く打ち出す必要があると考えております。

先ほどサウンディング型の市場調査という話もありましたが、具体的なテーマは、ソーシャルフォレストリーとかサーキュラーエコノミー、ゼロカーボン、再生エネルギーを活用した山岳リゾート観光、様々なアイデアがありました。こういったものの中から社会実装まで目標にした具体的な取組テーマを早くこの会議の中でお示しできるように固めていきたいと考えております。

そして二つ目、広域二次交通については、リニアが開業してから突然交通結節点としての機能をリニア駅に持たせることは非現実的であります。

開業する前から段階的にリニア駅周辺に人が集まる仕組みを、利用客が来る前から伊那谷の住民や交流人口によってそういった仕組みを作っていく必要があると思います。

リニア駅が建設されるこの広場は、デザインの話もありましたけれども、実際にはそこに人が集まるイベントが高頻度で開催され、そこにアクセスするための移動手段、モビリティを早期の段階から段階的に作っていく必要があると思います。

開業後にはこういった広域二次交通が、上伊那、木曽、下伊那を越えて県内の重要交通結節点として機能するようなことをイメージして、突然開業後にそれを機能させるのではなく段階的に取り組んでいくためのビジョン、計画を打ち出していく必要があると感じました。

今日初めて参加させていただきましたが、これからリニア局を中心に具体的な提案が議論できるように、ギアチェンジをして、この停滞感を打破し、進めていきたいと考えております。

私からの意見は以上でございます。

#### 【細野 リニア整備推進局次長】

どうもありがとうございました。まもなく予定した時間になります。

皆さん他にもあろうかと思いますが、また幹事会等で協議しながら進めさせていただきたいと思います。

最後に座長の知事から総括的なまとめをお願いいたします。

#### 【阿部知事】

どうもありがとうございました。非常に次に繋がるようなご意見いろいろいただけたと思います。

白鳥市長がおっしゃっていた具体的にもものが見えてこないというのは、私もずっと感じて、中ではそう主張していますので、しっかり具体的な取組を進めていきたいと思っています。下平村長がおっしゃっていたように民間とも一緒にグランドデザインを作っていく

ということは非常に重要だと思います。

お話しいただいたように長野県は東急とも包括連携協定を結ばせていただきましたし、先日佐藤市長とも一緒に豊橋へ伺って、豊橋の商工会議所の会頭それから浜松市の商工会議所の会頭ともお話をさせていただきました。民間の力をどうやってこの地域の発展に生かしていくことができるかがこれから非常に大きなテーマではないかと思います。

京浜急行との関係も含めて、しっかりやっていかなきゃいけないというのもあります。この間森沢品川区長ともお話しましたが、「飯田市とは繋がっていますよ」というお話をされていました。東京、名古屋、三遠南信、ある意味3地域は、伊那谷とほぼ隣接地域になるという感覚で、そういう地域の人たちともっともっと積極的に我々は今から交流した方がいいと思います。そういうところに行くときは私もできるだけ一緒に行くようにしますし、また私が行くときも伊那谷の市町村長の皆さんも一緒に行ってもらえると、いろんな繋がりができるのではないかと思います。

産業の観点では、豊橋、三河港も行ってきましたが、愛知県側からすると、この三遠南信で繋がることによって、自分たちの港をもっと使って欲しいという思いもありますので、そういう意味ではウィンウィンの関係を作れるような産業連携もしていくことが必要だと思います。

これからの議論はぜひ未来のまちをどう作るかという観点で、今の常識を超えていかなければいけないと思います。

少なくとも10年後20年後を見据えたまちづくりが必要になってくると思いますので、そういう視点で皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

交通はそういう意味では自動運転も視野に入れて考えることが必要ですし、今の国の規制改革とか権限移譲についても積極的に取り組んで、この地域から日本の新しい地方の形を作るのだという意気込みで取り組んでいきたいと思います。ぜひご協力をお願いすると同時に、我々県としてリーダーシップをとるというご指摘もありましたので、しっかり取り組んでまいりますということを申し上げ、私からの挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。

【細野 リニア整備推進局次長】

どうもありがとうございました。以上をもちまして、伊那谷自治体会議を閉会とさせていただきます。

本日は具体的な進め方についてご意見いただきまして誠にありがとうございました。

(以上)